

戦時期朝鮮の社会を読む—植民地研究と映画—

はじめに

- ・なぜ映画を取り上げるか
 - 植民地支配下の朝鮮社会を反映
 - 映画製作の特性、特に日朝合作映画の場合
- ・韓国での映画フィルムの発掘、映画史研究の進展

1 映画「望楼の決死隊」

朝鮮北部国境地帯の村を舞台にした活劇映画・プロパガンダ映画（1943年日本と朝鮮で封切り）

（1）従来の研究

강성률, <문명과 야만: 이항대립의 함정--<망루의 결사대>의 친일 논리>. 실천문학 76, 2004년.

김려실, 《투사하는 제국 투영하는 식민지 : 1901~1945년의 한국영화사를 되짚다》 삼인, 2006년

박현희, 《문예봉과 김신재 1932~1945》 선인, 2008년

T. Fujitani, *Race for Empire : Koreans as Japanese and Japanese as Americans during World War II*. University of California Press, 2011.

Naoki Mizuno, A Propaganda Film Subverting Ethnic Hierarchy?: "Suicide Squad at the Watchtower" and Colonial Korea. *Cross-Currents E-Journal* No. 5, Dec. 2012 pp.88-113

(<http://cross-currents.berkeley.edu/e-journal/issue-5>)

タカシ・フジタニ「植民地支配後期の“朝鮮”映画における国民、血、自決／民族自決」（『歴史の描き方 3 記憶が語りはじめる』東京大学出版会、2006年）

崔盛旭『今井正 戦時と戦後のあいだ』クレイン、2013年

（2）4種類のテキスト

脚本（『日本映画』1942年10月号、『大東亜』1943年3月号）

映画物語（『朝光』1943年2月号）

山形雄策著（小説）『望楼の決死隊』工人社、1943年3月

映画「望楼の決死隊」（東宝映画社、1943年）

(3) あらすじ (「キネマ写真館 日本映画データベース」映画演劇文化協会 HP より)

(http://kinema-shashinkan.jp/cinema/detail/-/1_1082)

【物語】 昭和 10 年頃の朝鮮総督府、南山里駐在所に国境警察官として新しい浅野巡查 (斎藤) が赴任してきた。駐在所では、警部補高津首席 (高田) の統括のもと、杉山 (清水)、熊沢 (鳥羽)、金、林、安巡查たちが任務に就いていた。浅野着任を歓迎する宴が開かれた。近所の料理店の主・王龍 (菅井) とその娘・王燕 (三谷) もこの一座にいた。高津警部補の妻・由子 (原) は、近所のお産を手伝いにいく。ある夜、金巡查は怪しい男に撃たれて殉職した。犯人は共産匪蛟龍の部下であり、渡河してこの地に潜入している様子だった。京城から殉職した金巡查の妹・金英淑がやってきた。金巡查の親友だった柳東純は、高津の名で英淑の学資を出してやることにする。英淑は京城に帰っていく。やがて鴨緑江が氷結した。高津首席のところへ郷里から母危篤の報せが届いたが、高津は妻の由子だけに打ち明け、部下には知らせず、帰京しようとしなかった。浅野巡查は不注意から銃を暴発させ、懲罰で江岸の警戒を命じられた。浅野巡查は辞職を願い出るが、高津首席に説教をされて意気消沈する。一方、英淑は洗練されて京城から帰ってきた。年が明け、王龍の倅・王虎 (佐山) がこっそり帰ってきて、王龍に近いうちに襲撃があるからここを立ち退くようにと頼むが、王龍は相手にしない。このとき蛟龍一味が王虎を裏切り者として狙撃するが、王龍がかばって倒れた。夜間警戒に当たっていた柳東純も撃たれた。高津首席が王虎を取り調べるが、王虎は泥を吐かない。対岸の蛟龍一味は夜明け近くになると、電話線を切断し、駐在所を包囲した。自警団員も警察官とともに防戦する。多勢に無勢、劣勢の中で次々と警察官は銃弾に倒れていく。望楼上では杉山巡查が倒れていた。熊沢巡查は浅野を探しに馬で裏門から出たところを撃たれた。林巡查は熊沢を助けに飛び出していく。王虎は留置場を出て、高津首席の渡した銃をひったくると、今まさに高津を撃とうとしていた匪賊を倒した。弾丸も尽きた。高津たちが太刀を振るって、襲い来る匪賊の群れの中に突撃しようとしたとき、増援のトラックが突入してきて、匪賊たちは退散していった。

【出演者】 高田稔、原節子、三谷幸子、斎藤英雄、菅井一郎、清水将夫、戸川弓子、鳥羽陽之助、浅田健三、佐山亮、斎藤英雄

【スタッフ】 製作 藤本眞澄 監督 今井正 脚本 山形雄策・八木隆一郎
音楽 鈴木静一 特撮 円谷英二 撮影 鈴木博 照明 平田光治
美術 松山崇 録音 片岡造

公開日 1943(昭和 18)年 04 月 15 日 製作会社東宝映画 配給会社東宝

上映時間 95 分 ジャンル 特撮・戦争・アクション

(追加) 演出補佐 崔寅奎 出演 金信哉、沈影、秦薫、朱仁奎、田澤二、木下陽
後援 朝鮮総督府 製作応援 朝鮮映画製作株式会社

2 映画「望楼の決死隊」製作の背景

(1) 国境警備の問題

- ・戦前日本の国境 樺太と朝鮮 長さ 1300 キロを超える 「国土防衛」の第一線
- ・朝鮮独立運動、「馬賊」の存在
- ・警察署、派出所、駐在所 30年代半ばには約 200 ヲ所、警察官 2000 人

(2) 国境警備をめぐる芸能

(映画) 若山治監督「国境を護る人々」日活、1926 年。

友成用三監督「国境の血涙」マキノ東京派映画、1926 年。

中根龍太郎監督「恋の守備隊」マキノ映画、1927 年。

仁科熊彦（葛見丈夫？）監督「国境の唄」松竹蒲田、1927 年。

島田章監督「国境警備の歌」京城・遠山プロダクション、1931 年

(絵画) 足立芝香（秀子）「夫は警備に」1926 年第 5 回朝鮮美術展覧会入選作

(歌) 「国境警備の歌」（1923 年頃）「朝鮮国境守備隊の歌」「身代り警備」（1939 年）など

(ラジオ放送) 「朝鮮国境警備慰安の夕べ」1934 年（？）～、1939 年から樺太国境も対象

(3) 映画「望楼の決死隊」における「内鮮一体」の表象

- ・警察官の部落巡回
- ・自警団員・村人が駐在所防御の石垣づくり
- ・特に高津の妻由子 村で看護婦、産婆の役割

「本映画製作の精神」（『大東亜』1943 年 3 月号）

「一、「望楼の決死隊」は単なる活劇映画や、興味本位に終わらせない。全篇を、国境警察官の精神と生活で貫く。

二、と云ふことは、国境警察官が、皇軍と変らぬ滅私奉公の精神に貫かれ、倦まずたゆまず、地味で危険なその任務遂行に邁進して居ることである。そして、事あれば必ず現はれる我が国民の長所、勇気、忍耐、献身融和協力一致をその行動と生活を通じて、遺憾なく發揮して居る姿を描くことである。〔中略〕駐在所が部落内の夫婦喧嘩の仲裁迄頼まれると云ふことは、その部落の中心たることの単的〔ママ〕な現はれであり、警察官の夫人達が産婆の講習を総督府に於て受ける等の事實は、駐在所と家族の部落に対する活動の最も善い具体的な例だらう。支那事変を通じて、駐在所の部落指導力は益々強まり、部落会を通じ、自衛団を通じて行はれる、その活動を、我々は色々見聞したのである。」

(4) 映画のモデル

- ・映画では「昭和 10 年の頃」とされる
- ・警察署・駐在所への襲撃事件

東興事件 1935年2月13日 東北人民革命軍第一軍 李紅光部隊 200名

ラジオ放送「国境警備隊慰問の夕」の当日未明

保田（普天堡）事件 1937年6月4日 東北抗日連軍第二軍 金日成部隊

・大吉里事件 1936年3月25日 平安北道昌城郡大吉里を満洲側の「匪賊」が襲撃

馬賊勝軍・天義と頭目不明の一派の合流匪約 150名

国境警察の駐在所にまで侵入 日本人巡查2名、自警団員1名が死亡、朝鮮人巡查1名が重傷

駐在所の騎銃3丁、軽機関銃1丁、拳銃2丁、銃弾などを奪われる

日本軍も出動して越境討伐 警察飛行機も

平安北道警察部長古川兼秀らは現場に急行

・「妻も銃とり応戦す」

古川警察部長談「就中同夜警官と共に居た自警団員許君と李青年団長との死を賭して警官をかばい、且つ敵の弾雨中を抜け出して二里もある昌坪駐在所へ走り伝令の重役を果たしたこと等、感激に堪へない。(略)なお夫が満人の家へ夜中査察に出て留守中の鈴木部長夫人は、中西部長と小原巡查が侵入した賊団と接戦して斃れた事務室の西側所宅に居て、冷静にも夫の銃を取り押入に身をかまえて、入ってきた賊を待ち受けていたこと等、第一線警官の夫人の他に見ざる勇姿であろう」(『京城日報』1936年3月29日)

・古川兼秀 大吉里事件の後、総督府警務局図書課長(映画検閲も担当、1936年10月～)を経て、保安課長(39年12月～42年10月)を務め、41年11月下旬・12月上旬には図書課長を兼任。

3 「望楼の決死隊」における民族的位階(ヒエラルヒー)と転覆の可能性

(1) 描かれた民族的位階

(男性) 駐在所首席(日本人) - 巡查(日本人) - 巡查(鮮人) - 自警団員(朝鮮人) - 村人 - 中国人
(女性) 首席の妻(由子) - 巡查の妻(林玉善) - 自警団員の恋人(金英淑) - 村の女性 - 中国人の娘

(2) サブストーリー

- ・孤児となった英淑が女医になって村に戻る
- ・看護婦役の由子より高い地位に立つ → 民族的位階を転覆する可能性

(3) 女医はどこから来たか

・「望楼の決死隊」のあらすじをつくったのは誰か

山形雄策の証言「私が脚色者として、「望楼の決死隊」製作に参加した時には、既に、共作者八木隆一郎、演出者今井正、製作者藤本真澄、崔寅奎諸君に依るストーリー第一案が出来上って居た。しかし、その後は等諸君と共に、朝鮮総督府警務局及び平安北道警察当局の絶大な援助指導の下に、実地視察及び資料蒐集に努め、案を練り、稿を改めること数回、現在の脚本が出来たのである。」(「望楼の決死隊脚本覚書」『日本映画』1942年10月号)

企画者崔寅奎

- ・映画「家なき天使」（監督崔寅奎、1941年、高麗映画協会）
（あらすじ） 孤児の明子(金信哉)と龍吉(李相夏)姉弟は、親方にいじめられて家出し離れ離れになる。救済事業家の方聖貧(金一海)に龍吉は助けられ、明子は聖貧の妻の兄である医師・安仁圭(秦薫)の医院で看護師になる。龍吉は孤児院「香隣園」から脱出しようとした友達2人を止めようとして、水に落ち危篤状態に陥る。龍吉は安医師の応急処置で危機を脱し、姉とも感動的に再会。孤児らは日章旗の下で「皇国臣民の誓詞」を誇らしげに朗読する。
- ・医者になることを決意する明子
- ・京城女子医学専門学校
朝鮮人女性が医師になる道
民族運動の一環
- ・校長は日本人佐藤剛蔵（第2代高楠栄、第3代鄭求忠）
教員の大半は朝鮮人 1941年時点で教授・助教授24名のうち朝鮮人19名
- ・修業年限5年（戦時の短縮で4年半または4年に）
1945年までに200名の女性医師を養成（うち朝鮮人190名）

4 「皇民化」「啓蒙」と植民地支配

(1) 監督崔寅奎の「啓蒙」

・崔寅奎（チェ・インギョ） 1911年平安北道に生れ。10歳代後半で日本に渡り、京都撮影所への入社を目指したが、失敗して帰国。録音技術にすぐれ、1939年「国境」で監督デビュー、「授業料」（1940年）「家なき天使」（1941年）で注目される。「望楼の決死隊」では企画、演出助手。「太陽の子供たち」（1944年）「愛と誓ひ」（1945年）を監督。解放後、独立運動を描いた「自由万歳」（1946年）などを演出。朝鮮戦争の際、北朝鮮に連行されたといわれる。

- ・映画「授業料」1940年
1938年秋、『京日小学生新聞』（京城日報社発行）の綴方募集で学務局長賞を受けた禹壽栄（光州北町小学校4年生）の作文「授業料」を映画化
- ・啓蒙のメッセージ「貧しい朝鮮人女性孤児でも勉強すれば、立派な人間に（女医にさえ）なれる」
⇒ 支配秩序を「転覆」する可能性

(2) 「転覆」可能性の否定、支配秩序の再構築

- ・「英淑＝女医」の隠蔽 シナリオ、小説に比べて映画では「女医」の言葉が少ない
- ・銃をとる由子 ⇒ 支配秩序、民族的位階の再構築

(3) 植民地支配と「啓蒙」

- ・「内鮮一体」「皇民化」のための教育、啓蒙

・植民地支配秩序の維持

安倍能成（もと京城帝国大学教授）の発言（1942年4月14日、海軍思想懇談会）

「日本は朝鮮において相当の教育を与えた。教育を与えた者はそれ並みに待遇しなければならない、しかしそれはやっていないから不満を買っている。教育を与えたことは正々堂々としている。よい政治ではある。しかしそれは非常な困難な政策である、何となれば相手を偉くするからである。その困難を日本人は自覚していない。ここに朝鮮問題の最も危険な点がある。」